研究団体と歩む半世紀
～学芸員の活動の揺籃としてのコミュニティ～

横須賀市自然・人文博物館　主任学芸員　**内舩 俊樹**

1．はじめに

横須賀市自然・人文博物館は神奈川県の南東部にある三浦半島のほぼ中央に位置し、半島全域を活動のフィールドとしている。当博物館は友の会のような組織をもたないが、学芸員の活動分野に関連する外部の研究団体がいくつか存在する。本稿はその一つである三浦半島昆虫研究会（略称：三昆研）について、発表者を含め２代にわたる学芸員との関係を軸に記すものである。

当博物館は 1954 年に「横須賀市博物館」として開館、その準備室として 1947 年に市郷土文化研究室が設置された。同研究室設置は市制 40 周年目にあたり、市史編さん事業も兼務した。市郷土文化研究室設置を契機として結成された三浦半島研究会[1]は、地域の郷土史家や後の当博物館学芸員らが集まったもので、同研究室の活動の延長として当博物館を支え、結成 10 年後の 1959 年には植物や自然保護などの部会が関連分野の担当学芸員に導かれ、外部の研究団体として独立していった。現在、当博物館の外部の研究団体には、こうした三浦半島研究会から派生したものがある一方で、その後に着任した学芸員がきっかけで創立したものもあり、三浦半島昆虫研究会は後者である。

写真１　大場信義氏
（博物館着任当年）.
横須賀市郷土資料室所蔵.

2．研究団体の誕生と発展の３０年

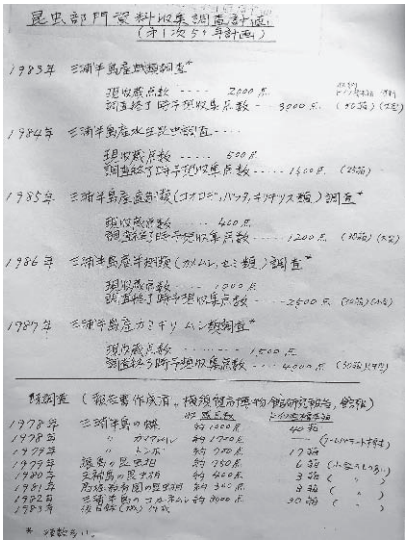
1）昆虫担当学芸員の設置・着任と研究団体の誕生

当博物館の昆虫担当学芸員は 1975 年、大場信義氏（1945–2020）（写真１）の着任とともに設置された。開館当初の当博物館の自然系学芸員は、発光生物学・動物学・植物学の３名であったが、1968 年から 1981 年にかけて学芸

1　瀧端真理子 2004「横須賀市自然・人文博物館の研究と教育 (1)―羽根田弥太と柴田敏隆の時代―」博物館学雑誌 29(2), pp.1–26.

員の新規採用／退職と分野の再編を経て、地球科学・魚類学・昆虫学・植物学の 4 名になった。大場氏は発光生物分野からホタル研究を引き継ぐとともに、動物分野から昆虫分野を独立させて担当することとなった。

1960 年代から 1970 年代にかけては、今も続く昆虫関係の商業雑誌が次々と創刊された時代[2]で、その若い読者層であった団塊の世代は、昆虫に対する市民の関心の高まりの中心にあり、各地の昆虫研究団体の創立や発展に寄与したと考えられる。大場氏はホタル研究のかたわら、博物館に出入りしていた 4 人の若者とともに三浦半島地域の昆虫標本の収集に着手、手始めに地域の蝶標本の収集を開始した様子が 1977 年 1 月に新聞に掲載された。その記事をきっかけに、アマチュア昆虫研究家でもあった近隣の中学校教員がかつての教え子たちを引き連れて博物館に出入りするようになり、同月 23 日に会員 15 名で三浦半島昆虫研究会が結成された[3]。


昆虫部門資料収集調査計画
（第1次5ヶ年計画）

1983年　三浦半島産蝶類調査*
現収蔵点数 ---- 2000点
調査終了時予想収集点数 ---- 3000点（1000）（x2）

1984年　三浦半島産水生昆虫調査 ----
現収蔵点数 ---- 500点
調査終了時予想収集点数 ---- 1500点（2000）

1985年　三浦半島産直翅類（コオロギ，バッタ，キリギリス類）調査*
現収蔵点数 ---- 400点
調査終了時予想収集点数 ---- 1200点（1000）（x2）

1986年　三浦半島産半翅類（カメムシ，セミ類）調査*
現収蔵点数 ---- 1000点
調査終了時予想収集点数 ---- 2500点（2000）（x2）

1987年　三浦半島産カミキリムシ類調査*
現収蔵点数 ---- 1500点
調査終了時予想収集点数 ---- 4000点（3000）（x2）

蝶調査（報告書作成済，横須賀市博物館研究報告，第27集）

		既収点数	上の全体予想
1978年	三浦半島の蝶	約1000点	440種
1978頃	〃 カイツブリ	約1700点	—（3-4000チョウ予想）
1979年	〃 上下	約700点	17種
1979年	横須賀の昆虫相	約750点	6目（小型甲虫のみ）
1980年	三浦半島の昆虫相	約400点	3目（〃）
1981年	鶴見緑地公園の昆虫相	約340点	3目（〃）
1982年	三浦半島のコガネムシ	約3000点	30種（〃）
1983年	横須賀（市内）の蝶		

* 複数年にわたる

写真２
収蔵庫に貼られた昆虫調査計画書.

2）研究団体とともに花開いた博物館の昆虫展示

当博物館の昆虫標本の登録台帳は、大場氏の着任をきっかけに 1976 年 2 月から運用が開始された。この台帳と収蔵庫に残る 1983 年当時の調査計画書（写真 2）とを参照すると、購入標本も含めてわずか 10 年で 2 万点近くもの地域の昆虫が標本として集められ、うち 1 万点を超える標本が登録されたことが分かる[4]。標本収集の多くを担ったのは三昆研の会員であり、学芸員と連携した収集調査活動として行われた成果は、当博物館の館報や研究報告に順次掲載された。1983 年は当博物館が新館建設を機に現在の名称に変わった年であるが、その前後にかけて昆虫を含む既設部分の展示リニューアルも行われた。当時、大場氏は一連のホタル研究の成果を博士論文にまとめていて、約 500 種 700 点におよぶ昆虫コーナーの常設展示更新（1984 年 4 月）（写真 3）や、

写真３　常設展示「昆虫」（通路の両側.
写真は一部更新された現在のもの）.

2　藤田　宏 2021「昆虫雑誌から見た日本昆虫界の 150 年―50 周年 600 号までの道―」月刊むし (600), pp.34–41.

3　鈴木　裕 2005「第 VI 章 三浦半島の昆虫研究史」(大場信義・三浦半島昆虫研究会編著) 特別展示解説書 8 三浦半島にすむ昆虫からのメッセージ―身近な自然 今昔―, pp.98–103.

4　内舩俊樹 2021「先輩学芸員・大場さんの背中」ホタルのニュースレター (86), pp.15–19.

特別展示「三浦半島の蝶」の開催（同年２月～４月）では、三昆研会員が標本収集だけでなく展示制作においても大場氏を助けた。国内を代表するホタル研究者のみならず当博物館の昆虫担当学芸員として、当時の大場氏が二つの立場を同時期に確立できたのは、着任早々に設立された三昆研との共同調査・展示制作によるところが大きい。

３）研究団体の発展、独立した活動

大場氏は学位取得以降、国内外のホタル研究 / 保全の最前線で活躍した。三昆研による昆虫調査の成果は、当初は前述のとおり大場氏との共著も含め当博物館の刊行物にて発表されていたが、1980 年に同会が創刊した会誌『かまくらちょう』の存在と、博物館への展示協力をとおして同会が地域での認知度を高めたことにより、三浦半島昆虫研究会は博物館から独立した外部の研究団体として活動できるようになった。

2000 年前後には会員数が 60 を超え、2004 年 9 月に『かまくらちょう』が 60 号を刊行するなど、三昆研は着実な発展をとげていた。一方でこの時期は、創立期から同会を支え続けた年長層の会員が定年を迎え始め、将来の担い手育成を意識しはじめた時期でもあった。大場氏が博物館を定年退職する 2005 年度に向け、三昆研は再び大場氏ならびに博物館との連携を模索した。退職の花道を飾る特別展示の開催協力と後任学芸員との連携を視野に入れた二つの事業提案である。

４）学芸員交替に際して研究団体が行った事業

特別展示『三浦半島にすむ昆虫たちからのメッセージ―身近な自然 今昔―』（2005 年 8 月～ 11 月開催）は、大場氏の昆虫担当学芸員としての活動の集大成であることはもちろん、三浦半島昆虫研究会にとっても 28 年間の集大成を意図したものであった。同名の展示解説書[5]は、三浦半島の昆虫を軸に自然の特徴や変遷をまとめ、地域における昆虫の呼称や遊びなどの文化のほか、三昆研の沿革も盛り込み、発表者にとって絶えず参照する資料の一つになっている。

発表者が大場氏の後任として着任したのは 2007 年度であり、1 年の空白期間があった。そこで三昆研は 2006 年度、後任学芸員の着任に向けた準備を進めた。一つは昆虫をテーマとした博物館行事の新規開講である。それまで当博物館の昆虫関係の行事は、三浦半島各地や付属自然教育園での自然観察会の一分野でしかなかったことから、新規行事は昆虫の採集法や標本づくりやスケッチなど調査・観察のための基礎技術の習得と人材育成の機会を求めたものである。もう一つは、会員有志で組織した「博物館昆虫資料整理研究会」である。前掲の特別展示をとおして、当博物館に収蔵されている未整理の昆虫資料の多さを実感したことから、大場氏の資料整理方針を引き継ぎ、後任学芸員による資料整理のサポートを目的とした定例作業である。

5　脚注３に挙げた冊子。

3．研究団体と後任学芸員との新たな関係

1）後任学芸員の着任と研究団体との連携

発表者は当博物館昆虫担当学芸員として着任後、前年度から当博物館研究員に着任した大場氏と三浦半島昆虫研究会の両者からそれぞれ引継ぎをする機会があった。収蔵資料やその整理方針、ホタル観察会に関する部分は大場氏から、資料整理の実務や新規開講される博物館行事「昆虫教室」については三昆研から、それぞれ打合せをもちながら進めた。

発表者の専門分野は元々、直翅系昆虫類（バッタ、カマキリ、ナナフシなど不完全変態類の一部）の系統進化であり、チョウやトンボなど野外で身近に観察できる昆虫類の顔ぶれには疎く、「昆虫教室」の開講に欠かせない地域の昆虫相への理解もまた不十分であった。そこで「昆虫教室」では、その当初から発表者とともに三昆研の会員有志にも講師として関わってもらった。参加者・会場・プログラムなどの運営や進行ならびに採集・観察・分類などの導入解説はいずれも発表者が行い、三昆研の講師には野外観察や標本づくりなどでの個別指導、飼育体験用の幼虫の準備などを分担いただいた。資料整理では、毎月の「資料整理研究会」の際に作業にあたる会員と整理方針について調整をおこない、整理・登録したコレクション目録を当博物館の資料集にて順次刊行した。

2）研究団体の若手幹事として解決すべき課題

前項の連携と並行して、発表者は三昆研の要望に応え、同会と博物館とをつなぐ調整役の幹事として会の運営に関わることとなった。発表者自身にも幹事の一人として同会に関わらねばならぬと感じていた理由が二つあった。一つは、前項の連携において発表者を含む「若手」[6]会員の意見や提案が年長者に受け入れられ難かったことである。学芸員－三昆研の間の調整でも同会幹事会でも、十分な議論を尽くせる関係とは言いがたい状況であった。もう一つは、「昆虫教室」を機に三昆研に入会を希望した小中学生に対して、定例会など同会の活動がその受け皿になり得ていなかったことである。入会した小中学生が三昆研の集まりに参加しても、話題は年長の会員たちによる昔を懐かしむ思い出や武勇伝が多くを占め、疎外感を抱いたまま退会するケースが相次いでいた。小中学生から「若手」に至る会員の定着と活躍は、2000 年代に入って世代交代を意識していた三昆研にとって重要な課題であったはずであり、幹事の一人としてその運営を改める必要性を感じていた。

3）研究団体を変える 3 つの取組み

発表者が 2010 年から 2019 年頃までの間に行った取組みは、「10 年後に若手会員を定着させる」ことを目指した次の 3 つ――①若手会員の帰属意識を高めるための活動、②会における

6　該当する会員は発表者も含め当時 30 ～ 40 代であったが、60 代後半以上の年長層が多数を占めた当時の三昆研ではまさに「若手」であり、年長層を支える 50 ～ 60 代前半の世代とともに少なく、30 歳未満については、ほとんどいなかった。

発言力を高める会務の遂行、③博物館と連携した新規事業や記念事業の企画――である。

①については、発表者と同世代の会員で非公式に「若手の会」をつくり、会員外の若手研究者を加えた食事会や合宿などを企画し、交流を深めた。この世代の会員は少数派であるだけでなく、知識と経験が豊富な年長層に対して遠慮がちで、会への帰属意識も低く感じられた。資料整理や教育活動に直接結びつく取り組みではなかったが、以降も新規入会の高校生・大学生も含めて「若手」が会になじむまでの受け皿として継続した。

②については、会誌『かまくらちょう』の編集を担当したことである。元々は、当時の編集担当が急きょ辞退したことと、会誌の体裁や掲載内容の改善を求める声が会の内外から上がったことへの対応であった。研究団体の顔である会誌の編集は重要な会務の一つであり、DTP ソフトを使用し体裁を安定化させるとともに、年長層に協力を仰いで査読制度を導入し掲載内容の信頼性を高めたことにより、編集担当として会の運営に欠かせない存在感を出すことができた。通常号の 3 倍の厚みで刊行された『かまくらちょう』89 号[7]では、その編集を一手に引き受けた担当として発表者が「あとがき」を任されたことは、その象徴

写真 4　2012 年度企画展示
「三浦半島のチョウ」展示解説の一場面.
若手会員による切り絵を使った解説.

表 1　発表者が企画した研究団体の事業

名称（時期）	概要	効果・結果
企画展示「三浦半島のチョウ」プロジェクト【2010 ～ 2012 年】（写真 4）	企画展示を軸とした約 30 年ぶりの同テーマの展示と再調査の協力体制の構築	蝶好きの若手会員の発言力を高め、過去の展示を知る年長会員の話に耳を傾ける、世代交流の機会
会のホームページ（HP）とメーリングリスト（ML）【2011 ～】	会の活動を公開する HP と、会員間の交流の場となる ML の設置・運用	HP 制作と運用に詳しい若手会員の存在感を高めた。定例会が ML のオフ会のようになり、世代間の交流が促進
定例会の一般公開化【2012 年～】	年 4 回博物館で実施する定例会を一般公開に変更	会の活動に興味をもった方の、体験入会や会員との距離を近づけた機会
「身近な昆虫」の選定と教育的展開【2013 年～】	地域での教育に用いる基幹的な昆虫種の選定と、教育普及活動の実施	2014 年度に全国科学博物館助成事業として遂行。選定では年長会員が、教育活動では若手会員が協力
ジュニア例会【2013 ～ 2014】	定例会と同日開催、若手会員主導で小中学生会員対象	若手会員の発案をもとに企画したものの、参加した年長者が主導してしまい企画倒れに
マイ・ベスト昆虫写真【2014 ～】	デジカメ普及を背景に開催した会員間のコンテスト	準備には若手会員も関わり、世代関係なく被写体の昆虫で盛り上がる機会

7　大場氏の仲介で 2006 年から 2012 年まで三昆研が実施した米海軍横須賀基地とその関連施設の調査プロジェクトについてまとめたもので、「特集：三浦半島の米海軍施設 昆虫調査報告書」（2016 年．227 ページ）として刊行した。

的な出来事として印象深い。

③については表 1 に示す。現在まで続く取組みや会員の意識を変えた取組みもある一方で、思い通りにいかなかった企画や、提案までで実施に至らなかった企画も数多くあった。

4）避けられぬ世代交代を乗り越えて

前項の 3 つの取組みを行ったおよそ 10 年のあいだ、その裏で進行していったことが二つある。一つは、幹事の過半数を占めていた年長層の幹事会員の一部が、自身の健康や介護を理由に引退したことである。他の幹事がその担当を兼務する場合もあったが、より下の世代が幹事に迎えられるようにもなり、幹事たちに世代交代の時代を実感させたできごとであった。これを受けて「若手」の提案を歓迎する機運も起こった。

もう一つは、「昆虫教室」を受講した小学生が、大学生になって博物館や三昆研に関わるようになったことである。受講した小学生の多くは昆虫が好きであるにもかかわらず中学・高校では運動部や受験を理由に博物館や三昆研から疎遠になっていたのだが、その先の大学で再び昆虫を専攻したことをきっかけに博物館を訪ねるようになったのである。前出の「若手」会員が発表者も含め 40 ～ 50 代となる中で、かつて三昆研が人材育成を意図し 2006 年から蒔きはじめた種が、ようやく実り始めたように感じたできごとであった。

4． 学芸員にとっての研究団体

第 2・3 節を振りかえり、本稿の主題である《学芸員の活動の揺籃としてのコミュニティ》について、三浦半島昆虫研究会に対して感じた 3 つの点をまとめる。

1）地域研究・教育のパートナーとしての研究団体

三昆研は大場氏とともに地域の昆虫調査と標本収集を目的として設立され、当初は博物館をベースに学芸員の調査へ協力していた。やがて独自に調査研究を重ねた時代を経て、学芸員の交代を機に、再び当博物館および学芸員に対する三昆研の調査協力が始まる一方、同会の会誌編集に学芸員が実務・学術面でサポートすることで、調査における相互的な連携へと発展した。教育活動では、展示更新や企画展示制作などへの単発・短期の協力、という当初の段階から、地域の自然に関する豊富な知識と経験で新任学芸員の講座をサポートする段階へと発展した。発表者は現在もなお三昆研と連携した昆虫の講座（2012 年以降、「基礎から学ぼう昆虫学」に改称）を継続しているが、その理由は 3）にて後述する。

2）学芸員が対人的な実務経験を育む場としての研究団体

第 3 節の取組みの背景には、当時の年長層が世代交代を意図する一方で自身がまだ活躍できており「若手」に対する期待のハードルを上げてしまっていた状況があったと発表者は考

える。同じ頃、発表者は「若手」学芸員として当博物館の学芸員間でも同様の状況を感じていた。ひょっとすると、こうした状況は研究団体や学芸員の組織など、異動がないまま高齢化していく組織ではありがちなことではないだろうか。若手が同世代との楽しみを見つけて組織への帰属意識を強めることや組織の重要な業務を担うことで発言の重要性を高めた取組みについて前述したが、それと同じようなことを当博物館でも行った[8]のは、それぞれが抱える問題の本質が同じであることの証左なのかもしれない。

表１に挙げたものや挙げるに至らなかったものなど、三昆研に対する提案をとおして、発表者は自身の企画力や合意形成力を高めることができたと振り返る。たとえ発言力を強めても、突飛な提案や共感しづらい説明では議論が進まなかったり、企画倒れになったりしたことを経験したからである。また、提案内容を他の幹事が実施できるよう段取りやアドバイスを行った経験は発表者自身のディレクション力を高めたと実感する。こうした経験は、当博物館着任後しばらく後輩学芸員もなく常に「若手」でいた発表者の境遇においても、専門知識以外で重要な実務経験を積む機会となった。

３）個性の尊重を参加者に伝えるための研究団体

発表者は学芸員の仕事を「人とモノ、人と人とをつなげる」ことと考え、教育普及活動においてはモノを介した展示や観察会を行う一方、人を介した講座も大切にしている。前述したように、「基礎から学ぼう昆虫学」において現在もなお三昆研の多くの会員に講師として関わっていただいているのは、地域の昆虫を追い続ける多様な先輩像を受講生たちに見てもらえる機会だと考えるからである。昆虫に対しては、だれしも幼い頃に一度は興味をもったにも関わらず、やがて多くの人の興味の対象から外れ、逆に忌避し排除しようとする人までいるのは周知のとおりである。発表者は、昆虫に強い興味をもち続ける人は成長にしたがい急速に学校や社会において少数派となり、小中学生や高校生にあっては孤立しやすく、自尊心を高めたり将来につながるキャリアをイメージしたりし難いのではないか、と考える。博物館の講座は、そうした参加者同士を交流させながら昆虫を学ぶ機会であるとともに、博物館と連携した研究団体の個性豊かな会員たちに、自分の言葉で自分の好きな虫やその探究方法を語らしむ機会でもある。会員たちが語り／見せる内容の中には、時として不正確であったり、自己流で普遍性がなかったりと、博物館講座として好ましくないと指摘される

写真５　「基礎から学ぼう昆虫学」における標本づくり．講師として関わる会員が各所で指導に当たる．

8　内舩俊樹 2018「商店街イベントへの参画による『つながる地域博物館』の試み」第 25 回全科協研究発表大会資料 , pp.21–29.

こともある。しかし、こうした点も含めてその会員の個性として尊重されることこそが、発表者が学芸員として講座参加者に見せたい“多様な先輩像”であることから、それを研究団体内や博物館との連携の中で大切にするよう心がけている。

５．５０年目に向けて

2020 年は 1 月末に大場氏の訃報があり、やがてコロナ禍にともなって様々な活動が制限された。これらの三昆研の創立や活動を揺るがすニュースに会員も大きく動揺した。定例会はすぐにリモートで実施できるようになったが、ハイブリッド例会として運用できるまでのおよそ半年間は、年長層の会員の一部にとっては通信技術面で疎外されてしまった期間でもあり、現在再び対面で開催できていることの重要性をかみしめている。

一方で、『かまくらちょう』が節目となる 100 号が視野に入った 2021 年頃から、会の内外から記念の寄稿の依頼者を選定するとともに、記念企画として「三浦半島昆虫誌プロジェクト」を構想することになった。この企画は、三昆研創立以前も含めた三浦半島地域での昆虫の記録を目録としてまとめるというもので、目録は『かまくらちょう』に寄稿する会員のみならず、三浦半島の昆虫調査に関わる全ての人が過去の調査記録を総覧できる資料になるであろう。この企画については、2016 年頃に発表者が幹事の一部に提案し三昆研の事業になるかどうか打診したこともあったが、大掛かりな計画だったこともあり、ここにきてようやく検討の俎上に載った。2023 年 3 月、多くの寄稿とともに全号の総目次を掲載した『かまくらちょう』100 号が刊行され、いよいよ『三浦半島昆虫誌』刊行を三昆研の 50 周年（2027 年）に向けた事業としてスタートさせた。現在進行中の作業であるが、年長層の会員も「若手」会員も、さらには高校生や 20 代の若手会員も、目録づくりに向けた文献情報の入力作業を分担している。最近では、前出の「基礎から学ぼう昆虫学」への参加を機に近年三昆研に入会した小学生の母親たちまでもが、「子どもが研究会の先生にお世話になっているので、何かお返しがしたい」と作業へ参加しており、三昆研にとって前例のない体制での活動が起こっている。

近年の三昆研の大きな動きにとって重要な人物として、現代表の中村進一氏を挙げたい。中村氏は三昆研の年長層より若く、三昆研創立に参加した中学校教員の教え子の一人として初代の代表を務めた。やがて神奈川県立生命の星・地球博物館元学芸員の高桑正敏氏（1947–2016）とともに県の昆虫研究団体の活動に専念するため三昆研を離れ、表 1 に挙げた企画展示「三浦半島のチョウ」の準備をきっかけに約 30 年ぶりに三昆研の活動に関わり、2016 年から再び代表に就任した。蝶について年長層から一目置かれる実力をもつ一方、快活であらゆる世代と分け隔てなく接する人柄で三昆研をまとめ、当博物館をはじめ様々な団体や個人、行政の職員などとも気さくにやり取りができる人物である。前述した 50 年目の三昆研に向けた前例のない体制と活動は、中村代表の存在抜きには語れない。

博物館と研究団体の関わりは、時代によって、また担当学芸員との連携内容によって変容す

るものであることは、本稿をご覧いただいても明らかである。博物館という、地域の中で永続することが求められる機関にあって研究団体との協力関係は、その時代の博物館の機能を強化するとともに、ときには学芸員の世代交代における機能低下を補うものである。研究団体との協力関係は、担当学芸員にとって専門性を高める間のサポーターとして、対人的な実務経験を積む場として、まさに成長を支える「揺籃」であったと実感している。博物館にとっての研究団体については、団体が提供する人手や知識・経験にのみ注目が行きがちだが、会員一人ひとりの生きざまもまた重要であり、地域に潜在する多様な学び手に多様な先輩像を見せてくれる。このことを、発表者が「揺籃」で得た新たな発見として挙げ、本稿の締めくくりとしたい。

写真６　三昆研の年末の定例会.
写真右端は代表である中村氏.